

白纏う夏のやり直し

I am yukkuri

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

IS学園に通う織斑一夏。彼は、あるISとの戦いにおいて、重傷を負い、死んでしまう……はずだった。

気がついた一夏は、なんとあの戦いから4年も前に逆行していた。彼は、あの悪夢の結末を変えるため、あることを決意する。

\*また、浮気です。ごめんなさい！えーと、注意事項については、いつも通りです。\*

・ゴミ箱に捨てられた落書きレベルの駄文。

・暑さもくそもない戦闘描写。

・青春？何それおいしいの？

- ・ダンボール戦機好きを名乗りながら汚すようなことしかない描写。
- ・ダンボール戦機爆ブーストのオリジナルLBXが登場します。
- ・アンチ・ヘイト多分に含まれる可能性があります。
- ・原作キャラ死亡の描写。

# 目次

第0話：繰り返される青春	1
白纏う夏のやり直しの設定集	6
第2話：もう1度だけの入学式	10
第3話：奪われた白式	16

## 第0話：繰り返される青春

「グアッ！」

壁に叩きつけられ、肺から空気が逃げていき、息苦しさが体を襲う。

「大丈夫か!? 嫁！」

「大丈夫だ！ ラウラ！ 戦いに集中しろ！」

それを聞いた銀髪の少女、ラウラはすぐに戦いに意識を向ける。その視線の先には、青い炎を身に纏う、もはやISというより、怪物と呼ぶべきものがいた。それはうなり声をあげながらラウラに襲いかかる。すぐに立ち上がり、ラウラのフォローにまわろうとする。

「グギヤアアアアア！」

「うおお!!」

しかし、それより早く怪物―イフリート改―はラウラに肉薄し、殴り飛ばす。そのままラウラは壁に叩きつけられ、苦しげに声を漏らす。

「ぐう……………」

「グルル……………」

その声を聞いたイフリート改は、満足げに声を漏らす。その隙をつこうと瞬時加速—イグニツションブースト—で肉薄するが、瞬時に反応され、殴り飛ばされる。

「うぐう！ 舐めるなあ！」

しかし、すぐに受け身をとって、体制を立て直す。そのまま、俺の切り札を使おうとする。それを察したイフリート改は、俺を迎撃しようとするが、突如の攻撃にこちらへの警戒を解く。

「今だ！ 嫁！」

「ああ！」

そのまま、瞬時加速を使い、俺の切り札—零落白夜—を叩き込もうとする。しかし……

『ヴァルゾダース！』

「グアアアアア！」

カウンターを入れられ、再び壁に叩きつけられる。ISを装備しているので、骨が折れたりはない……そう思っていたが。

「ガフツ……え……？」

血を、吐いた。ふと見れば、ISはなくなっている。叩きつけられる前に無くなったのだろうか。分からない。頭が回らない。

「おい、嫁！大丈夫か!？」

ラウラの声が遠く聞こえる。意識がふわふわしているような。そんな感覚を覚えながら、俺の意識は闇に落ちた。

「…………夏…………一夏!」

俺を呼ぶ声が聞こえる。一体、誰だ。ラウラか?でも、この声は。

「千冬……………姉……………」

「ああ、よかった!ドイツ軍からお前が誘拐されたと聞いた時には本当に……………どうした?」

「……………なあ、千冬姉?今、何年なんだ?」

「今か?今は……………」

千冬姉が告げた年は……………

「4年……………前……………」

あの、恐ろしいイフリート改は?ラウラは?シャルは?セシリアは?鈴は?箒は?俺

たちを裏切ったあいつは？

「どうしたんだ？一夏？頭でも痛いのか？」

「い、いや……何でもない……」

これは、俺は過去に戻ったのか？どうして？……いや、もしかしたら、やり直せるんじゃない？あの、恐ろしい悪夢を、変えられるんじゃないのか？

「……なあ、千冬姉。頼みがあるんだ」

「何だ？一夏。私に聞けるなら、何でも聞くぞ？」

きつと、辛いかもしれないし、辞めたくなくなるかもしれない。でも、せめて手が届く範囲の人だけでも守れるようになりたい。あの時と同じようになるとも限らない。これは、俺のわがままで。それでも……繰り返すが、俺は、俺の手が届く範囲の人だけでも守れるようになりたい。だから……

「俺を、時間があつたらでいい。鍛えてほしいんだ」

「……それは、何でだ」

「……守られるばかりじゃ、嫌なんだ。これは、俺のわがままで。千冬姉がいいならでいい」

千冬姉の、答えは。

「……分かった。しかし、私は、弟だからと言って、容赦はしないぞ？」



「もちろんだ。よろしくお願いします。織斑先生」

俺がそういうと、千冬姉は驚いた顔をした後、ニヤリと笑うのであった……俺、頑張れるかな？ いや、頑張るしかないよな！

## 白纏う夏のやり直しの設定集

織斑一夏（おりむらいちか）：本作での主人公。享年16歳。イフリート改との戦闘で、不運にも白式が壁に叩きつけられる前に解除されてしまい、絶対防御が発動することがなく、骨折、臓器の負傷によって死亡。その後、イフリート改との戦闘の4年前に逆行。あの悪夢の結末を変えるためと、織斑千冬に修行を頼む。篠ノ之箒、風鈴音とは、幼なじみ。使用ISは、白式。

篠ノ之箒（しのののほうき）：一夏のファースト幼なじみ。享年16歳。世界を揺るがす大天災、篠ノ之束の実の妹。イフリート改との戦闘で、ISの絶対防御ごと腹に穴を開けられ、出血多量で死亡。イフリート改との戦闘での最初の死者。使用ISは、紅椿。風鈴音（ふあんりんいん）：一夏のセカンド幼なじみ。享年16歳。中国代表候補生。イフリート改との戦闘で、ヴァルゾダースにより、壁と挟まれ、肋骨がへし折れ、肺に刺さり死亡。使用ISは、甲龍。

セシリア・オルコット（せしりあおるこつと）：一夏のクラスメイト。享年16歳。イギリス代表候補生。イフリート改との戦闘で、

---

によって、ISごと溶かされ、死体も残らず死亡。使用ISは、ブルー・ティアーズ。

シャルロット・デユノア（しやるろつとでゆのあ）：一夏のクラスメート。享年16歳。デユノア社の令嬢。イフリート改との戦闘で、シールドエネルギーが無くなり、ISが無いまま殴られ続け、全身骨折、死亡。使用ISは、ラファール・リヴァイヴ・カスタムII。

ラウラ・ボーデヴィツヒ（らうらぼーでう）いつひ）：一夏のクラスメート。享年16歳。ドイツ代表候補生。一夏を嫁と呼んでいる。イフリート改との戦闘で、立ち向かうも、なすすべなく叩きのめされ、ヴァルゾダースで壁に叩きつけられ、

—でISごと溶かされ、死亡。使用ISは、シュヴァルツエア・レーゲン。

織斑千冬（おりむらちふゆ）：一夏の実の姉、そして唯一の肉親。世界最強《ブリュンヒルデ》の名を持つ。

篠ノ之束（しのののたばね）：箒の実の姉、世界を揺るがす大天災。ISの開発者。

白式（びやくしき）：一夏の専用機。基本スペックは高いものの、雪片式型という刀一本がメイン武器。切り札として、単一仕様能力（ワンオフアピリテイ）、零落白夜という必殺技じみたものを持つ。

紅椿（あかつばき）：箒の専用機。多数の武装を持つ機体。単一仕様能力に、絢爛舞踏を持つ。

甲龍（しえんろん）：鈴の専用機。燃費と安定性に重点を置いた機体。初見殺しといえ

る、龍砲を持つ。

ブルー・テイアーズ（ぶるーていあーず）：セシアの専用機。ビット兵器のデータ採取用の機体。自立起動兵器、ブルー・テイアーズを持つ。

ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ（らふあーるりう”あいう”かすたむつー）：シャルロットの専用機。20種ほどの武装を扱う汎用機。リヴァイヴ専用のパッケージ、ガーデン・カーテンを持つ。

シユヴァルツエア・レーゲン（しゅう”あるつえあれーげん）：ラウラの専用機。遠近戦をこなす万能機。特殊兵装甲に、AICを持つ。

イフリート改（いふりーとかい）：第5世代とでも言うべき性能を誇る、一応IS。単一仕様能力に、必殺フアंकシヨンという多くの必殺技を持つ。また、特殊モードとして、——モードを持つ。

——：一夏の新たな専用機。試作機であり、各部に性能測定用のマーカーがついている。

——：一夏の特殊能力。人々を導く力と言われている。一夏自身は、自分にこの能力があることを知らない。逆行前も、自覚はしていないし、使えなかったが、持つてはいた。

——：特殊な力を持つ子供を意図的に作り上げ、世界を導く天使とし

て君臨させようとした計画。2人の成功を除き、ことごとく失敗。計画は破棄、凍結される。(なお、ラウラたちに移植された眼は、この計画の副産物)

## 第2話：もう1度だけの入学式

『いいか！今のお前は私の部下だ！返事はYesかはいだ！いいな!?』

……辛かった。何を言っているか分からないかもしれないけど、辛かった。

あれはもう軍隊だよ軍隊。自分から言ったが、あそこまでしごかれるとは思わなかった。

でも、俺のわがままに付き合ってくれた千冬姉には、すごく感謝してる。

……1回、千冬姉に言われたことがあった。

『誰かを守る。それに一夏は力が必要だと思ってるんだな?』

あの時、俺は即答した。もちろんと。そう言った俺に、千冬姉はこう言った。

『なら、誰かを傷つけることを覚悟しておけ。力は、守るためだけじゃない。他者を傷つけるものでもある。力に溺れるな』

俺には、心当たりがあった。俺たちは、世界を守ろうとして力を使った。あのイフリート改は、恐ろしい力を持ち、多くの人を傷つけた。どっちも力を持っていた。俺も、

白式の力を過信していたりした。力に溺れるっていうのは、そういうことなのだろう。守るっていうのは、難しいことだと今さら分かった。

それでも、俺はあの悪夢からみんなを守りたい。難しいことだと分かってても、それは諦められない。みんなは、俺のことを知らないだろうし、それでもいい。俺の勝手なわがままだ。俺は、また千冬姉にもうひとつ嘘をついた。

『私立藍越学園を受験する』

俺は、I S学園を受ける。今まで、俺が過去に体験したことは、この世界でも起きた。ただの推測だが、アイツもきつと来るだろう。さて、明日はI S学園の受験日だ。さつさと寝るとしよう。

「さて、ここがI S学園の受験会場か……」

翌日、さつさと起きて準備をし、藍越学園ではなく、I S学園へと足を運んだ。正確には、受験会場より、そこに置いてあるI Sが目的だ。今日やるべきなのは、I Sを起動する。それだけだ。

「忍び込むのはどうかと思うが、まあ、俺の目的のためだ……許せ。他の皆」  
誰にも知られないまま忍び込み、さっさとISのある部屋についた。

「ここに来るのは4年ぶりだけど、意外と覚えてるな……にしても、警備がぎる……いや、試験会場に警備が集中してるのか」

まあ、それでも警備が手薄過ぎるが。さっそくISに触れる。

「……やっぱり起動した……よく考えてみれば、束さんが手を回してた可能性が  
高いよな……」

よくよく考えてみれば、束さんが手を回してた可能性は高い。

「おい、君……ここで何……を……!?!」

おっと、もう人が来たのか。ここは……

「あ、職員の人ですか!何か、うっかり触っちゃったら動いたんですよ!どういうこと  
ですか!」

「それを私に聞かれても……」

こうして、また来た職員の人があたふたしてるうちに、千冬姉に帰りが遅くなることを告げ、IS学園への入学届けを書いて、今日は家へと帰ったのだった。



「……………久しぶりだなあ。ここに来るのも2回目か……………」

今日は、IS学園の入学式。それも終わって、教室にいる。

(こうして見ていると、懐かしい気分になるな……………)

そうやって懐かしい気分には浸っていると、チャイムが鳴り、教師である山田先生が入ってきた。

「皆さん、おはようございます！今日から3年間皆さんの担任を勤める、副担任の山田真耶です！」

うん、元気な人だ。でも悲しいかな。みんなしーんとしてる。

「うう、自己紹介始めてください……………」

うん、自己紹介して何も言われないと悲しいよね。よく分かる。俺も、中学の時……………」

「織斑くん！次自己紹介してもらっていいかな!？」

「あ、すいません！」

いけないいけない、考え事し過ぎた。

「えーと、織斑一夏です。特技は、料理です。よろしくお願いします！」

簡潔に自己紹介したが、みんなもの足りなさげな顔だなあ……

「当たり前だ。どこにこんな簡潔な自己紹介がある。もうちよつとしゃべらんか」

「うおっ！千冬姉え！」

そういつた瞬間頭に鋭い痛みが！

「ここでは織斑先生と呼べ。あの時のようにな」

「……はい」

叩くのではないぞ千冬姉……ていうか仕事を、しかも公務員をし始めたって聞いたんだけど、まさかIS学園の教師だとは。

「山田先生、すいません。少し用事が長引いてしまつて」

「いえ、副担任として、当然のことをしたままですから！」

「そう言ってもらえるとありがたいです」

そして、千冬姉はこつちを向いて、自己紹介する。

「さて、皆知っていると思うが、織斑千冬だ。私たちは、お前らを立派なIS乗りにすることが目的だ。私の言うことには、はいかYesで答える」

「「「「きやあああああ！千冬様あああああ！「「「」」」」」」

「全く、私のクラスには馬鹿しかいないのか？いや、私のクラスに集中させているのか

……」

生徒に向かって馬鹿はないと思うぞ千冬姉……

「はあ、まあいい。今から、クラス代表を決める。これは、自薦、他薦を問わない」

「あ、それなら織斑君がいいと思います！」

「あ、私も！」

う、やっぱりか。

「お待ちください！」

ああ、やっぱり。久しぶりだなあ……

「セシリア・オルコット……」

やっぱり、2回目でも、戦うことになるかな……

### 第3話：奪われた白式

「お前は、セシリアか。なんだ？」

それを聞いたセシリアは、長い日本侮辱と、男がいかに弱いかを力説、そして、自分はイギリス代表候補生であり、唯一教師を倒した故に自分がやるべきと締め括った……：そういえば、セシリアとの初対面って、こんな感じだったなあ……

「な、何ですの、あなた！なぜ私を久しぶりに来た孫を見るような目で見るのです！え、そんな目してたのか。気づかなかった……

「くう！あなたはやる気がありますの!？」

「ああ、やる気はあるぜ」

「そうですか……：それなら簡単です！決闘ですわ！」

セシリアがそういうと、クラス中がざわめき始める。まあ、ついさつき唯一教師を倒したって言ってたしな。

「分かった、いつだ？」

「1週間後、それまでに少しは強くなっていることを願いますわ」

1週間後か。あの時と同じ……いや、それよりも強くなれる。

「ああ、分かった。1週間後だな」

「はあ、この馬鹿どもが……分かった、1週間後にアリーナでクラス代表決定戦を行う。いいな？二人とも？」

「ええ、構いませんわ。織斑一夏、あなたの泣き顔、楽しみにしていますわ」

「そうか、俺は滅多なことじゃ泣かないけどな」

そう軽口で返す。さて、結果はどうなるやら……

「お前、体力はついたらしいが、剣道がからつきしダメになってるじゃないか！」

うん、どうしてこうなった？

えーと、授業が終わり、放課後になって、そしたらファースト幼なじみの箒に再会して、稽古をつけてくれるって言って、ホイホイついていった……なるほど、稽古は、剣道の稽古だったか。

「ごめん、バイトだったり、体力作りとかで、ちよつとな……」

「はあ、それならしょうがない。しかし、まさかここまでダメになるとは……」

うん、人間やらないことって、微妙に劣化するけど、ここまで劣化してるのは予想外だった。

「まあいい。明日には、ISの訓練だ。いいな?」

その問いには、もちろん、はいと答えたが、箒、感覚派だからなあ……この分で、クラス代表決定戦までに間に合うかなあ……

---

「俺に、専用機?」

「はい、男性初の操縦者ということで、データが欲しいみたいです」

ああ、やつぱり。まあ、食いつかない方がおかしいかな、うん。

「そうか、これでなんとかなるかもな? 一夏」

箒はそう言うが、実際のところ、分からない。ISの使用も申請は出してるけど、クラス代表決定戦までに使うのは無理だそう。これでどこまでやれるか……そう考えていると、セシリアが来た。

「あら、専用機ですか。訓練機でやろうだなんて言わなくてよかったですわ」

「専用機が来なくてもやるけどな」

「あらあら、強気ですこと……その口が嗚咽しか出せないようになるのを楽しみにしていますわ」

そういつて、セシリアは去っていく。だが、専用機が来なかつたら、やる気ではある。

「おい、一夏。今、私は聞き捨てならんことを聞いた気がするが？」

「訓練機でやるつてやつか？」

「うむ、条件が違いすぎる。来なかつたら、おとなしく棄権した方がいいと思うぞ？」

うーむ、そうなんだが、これに関しては、俺のプライドというか。逃げる気はないな。

「はあ、お前のことだし、言つても聞かんか。」

さすがファースト幼なじみ。俺のことをよく分かっている。

「まあ、食いつけないとしても、やりようはあるさ。なんくるないさつてね」

「……お前、そんな軽口を叩くやつだったか……？」

そんなにな。まあ、怪しまれたらあれだし、これから気をつけていこう。

「専用機、来ないな……」

「そうだな。本当に訓練機でやることになるかもな」

今日は、クラス代表決定戦当日。俺たちなりに努力はした。それに、ISのイメージはよくできてる。ISはイメージが重要とは、千冬姉の談だ。

「お、織斑くーん！た、大変ですよー！」

「どうしたんですか山田先生、まず落ち着いてください」

「お、落ち着いてられないんですよー！」

山田先生がなにやら大慌てできて、箒が落ち着くよう言うが、それどころではないと返す。そして、山田先生が言ったことは、驚くべきことだった。

「二夏君の専用機が、強奪されたんですよー！」

「ええ、ええええええ！」